

北条弥源太への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

去る月御来臨。急ぎ急ぎ御帰宅本意なく存ぜしめ候ひ畢んぬ。

抑 ^{そもそも} 蒙古国牒状到来の事、上一人より下万民に至るまで ^{きょうどう} 驚動極まり無し。然りと雖も何なる故と人未だ之を知らず。日蓮兼ねて存知せしむるの間、既に一論を造りて之を ^{しんらん} 進覽せり。微 ^{しるし} 先立って ^{さき} 顕はる、則 ^{すなわ} ち災ひ必ず後に來たる。去ぬる正嘉元年 ^{ひのとのみ} 丁巳八月廿三日 ^{いぬいの} 戌亥刻の大地震、是 ^{しかしなが} 併 ^{ずい} ら此の瑞に非ずや。法華經に云はく「如是相」と。天台大師云はく「蜘蛛 ^ち 掛 ^{ちゅう} かりて喜 ^か び事來たり、鴉 ^{かん} 鵲 ^{じゃく} 鳴きて行人來たる」と。易に云はく「吉凶動に於て生ず」と。此等の本文 ^{あに} 豈替はるべけんや。所詮諸宗の歸依を止めて一乘妙經を信受せしむべきの由、勘文を捧げ候。

日本亡国の根源は、浄土・真言・禅宗・律宗の邪法悪法より起これり。諸宗を召し合はせ諸經の勝劣を分別せしめ給へ。殊に貴辺 ^{さがみ} は相模守殿の同姓なり。根本滅せんに於ては枝葉豈栄へんや。早く蒙古国 ^{じょうぶく} を調伏し国土安穩ならしめ給へ。法華を謗ずる者は三世諸仏の大怨敵なり。天照太神・八幡大菩薩等、此の国を捨て給ふ故に大蒙古国より牒状來たるか。自今已後各々生け取りと成り他国の ^{やつこ} 奴と成るべし。

此の趣方々へ之を驚かし、愚状を進ぜしめ候なり。恐々謹言。

文永五年 ^{戊辰} 十月十一日

日 蓮 花 押

謹上 弥源太入道殿